慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オーラル・ヒストリーの広がりと深まり : アーカイブの視点を交えて
Sub Title	The dissemination and deepening of oral history : mixing archival perspectives
Author	御厨, 貴(Mikuriya, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2019
Jtitle	Booklet Vol.27, (2019.) ,p.126- [134]
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Art and archive 7 図版削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000027-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オーラル・ヒストリーの広がりと深まり
——アーカイブの視点を交えて

御厨　貴

＊本稿は、2018年11月17日に開催したシンポジウム「KUAC Art Archive 20周年ジェネティック・エンジン」（慶應義塾大学三田キャンパス）での録画映像による講演を、アート・センターにて書き起こしたものです。

本日はこれから、少しのあいだ時間をお借りして、私がこの25年間取り組んできたオーラル・ヒストリーが、一体当初はどのようなもので、それが途中でどのようになり、現在はどうなっているのか、ということを簡単にお話したいと思います。

25年前と言えば、ちょうど平成が始まる頃、1990年代です。1990年代にはまだ日本には実のところオーラル・ヒストリーという言葉すら、ほとんど導入されていませんでした。ところがミシガン大学やハーバード大学などに行くと、オーラル・ヒストリーはすでに一般的でした。アメリカはさすがマニュアル社会ですから、驚いたことに夏休みなどに行くと、サマー・スクールで「どのようにオーラル・ヒストリーができるか」という講座を開講しています。このようなアメリカの状況を眺めたときに、日本で従来行われてきた「覚え書き」や「聞き書き」とは随分違う印象を持ちました。オーラル・ヒストリーそのものが、ある活動のための手段になっていて、しかも場合によってはオーラル・ヒストリーで仕上がったものが作品になっている、というのがアメリカにおいては日常であったのです。

では日本はどうだったのかと言いますと、その頃は、特に歴史分野の学者がオーラル・ヒストリーを使っていたのですが、これははっきり申し上げて、歴史家のいわゆる文書史料のしもべのような扱いでした。つまり、文書史料がないところを、仕方ないので話してもらい補う。それで、都合よく話しているうちに文書史料があれば、引っ張り出す…ということが行われており、覚え書きや聞き書きが、それ自体作品になるという発想は、この当時は全くありませんでした。だから、90年代に私が最初にオーラル・ヒストリーという言葉で始めたときに、我々より上の世代の研究者からは「一言注意をしておく。これは

君、一つの手段なのだからね。方法であって、これ自体が学問ではないのだ。学問の一つの方法論に過ぎない。そこを忘れて飛び出してはいけないよ」と言われました。いや私はそこを忘れて飛び出そうとしていたのに、これはなかなか上の方々は厳しい、と思いました。

ところが、そういう懸念はまもなく無くなりました。オーラル・ヒストリーで我々がお願いをしてしゃべってくれる人がいるとして、（その書き起こしを）かつて我々の先輩は、和文タイプで打っていました。これが、穴が空いており、誤字脱字だらけで、しかも製品として出来上がってくるのに半年以上もかかる状態です。話してくれた本人が見た時には「俺はこんなことしゃべっていない」と思ってしまいます。ところがそれがどうなったか。90年代はコンピューターなどの革命的進歩があった時期で、コンピューターの専門家が書き起こすと、たとえば今私が話している内容が翌日には活字になって出てきます。

「でも、オーラルは結局、その人の感じたことや思っていることをしゃべってもらうわけだから、最終的には嘘をつかれても分からないでしょう。だから結局、嘘がたくさん含まれている中で、どれだけ取り出してくるかが勝負ですね」と言われたことがありますが、私はだんだん「そんなことはないな」と思うようになりました。人間とは不思議ですが、先程も言ったように、穴が空いてデコボコで、ほとんど文章のように見えないようなものであるならば、これは「やっぱり俺はこんなこと言ってないよ」と言いますが、一応きちんと話し言葉になって、それが印刷されて出てくると、「これは、俺は言っていない」とは言いにくいのです。なぜなら、周りの人も聞いているので、「この通りしゃべっているよね」となるわけです。それでも「ここはまずいから削ってくれ」と言われることはあります。ただ、まずいから削ってくれというのも、一度その人の口から出てしまうと、それが例えば相手に対するものすごく名誉毀損的な攻撃であったりするならば、私は喜んでそれを消去することに賛成しますが、そうでない場合は、一旦しゃべった場合、そこには責任があるわけです。何故これを今、自分としては取り下げないといけないのか、自分で考えて言わなければならない。そうすると「今の時期だと、まずいからね」という話では済まなくなります。「思い切って、じゃあもうここで［外に］出しますか」となる場面を随分見てきました。ですから、通信革命が起こると、今日しゃべったものが明日出てくる。それもきちんと文章化されているため、オーラル・ヒストリーは大きく進んだのだと思います。

もう一つ、オーラル・ヒストリーを語る場合に言っておかなければいけないことですが、我々は当時気負いがありましたから、オーラル・ヒストリーの定義をしました。「公人の専門家による万人のための聞き書きである」。どこかで聞いたことがあるフレーズです。リンカーンのあの宣言に似ていますね。公人と言ったのは、私人のおしゃべりを捕まえてくるのではないという意味です。公人、つまり政治家とか公務員とか、そのような方たちの公的職務についての発言を、きちんと「専門家」（プロフェッショナル）が「記録する」という言い方をしたので、新聞記者とは随分大喧嘩になりました。「俺たちもプロだ」と

彼らは言うわけです。我々がその当時敵視していたのは、新聞記者でした。新聞記者は往々にして話を作る。それが一回限りでいいものですから、相手を怒らせたりする。こうしたことを、絶対やってはいけないと思って進めていきました。

もう一つは、これは普通の文章の資料の場合でも言えることですが、研究者によっては秘匿するのです。人に見せない。昔、私も見たことがあるのですが「この資料を見たいな」と思って最後のところを見ると「著者所蔵」と書いてある。「著者所蔵」と書いてあったら見られませんから、これはいけない。なるべく早く、オーラル・ヒストリーとしてまとめたものを報告書の形で、できたら商業出版で外に出すべきである。そのような気負いを持って始めました。

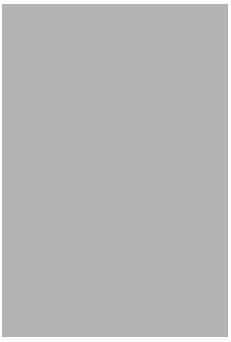
現実には、外に出すことは意外なほど早い時期に成功しました。それは、掴んだ人間が良かったのです。つまり我々が最初に掴んだのは、後藤田正晴（1914－2005）という中曽根時代の官房長官でした。戦前からずっと内務省・警察庁にいて、いろいろな警察内部に関して詳しい、そのプロを最初に掴んだのです。彼にしゃべってもらうということで、実に一回2時間、1ヶ月ずつ行い、計27回しゃべってもらいました。27回というのは、一回に2時間ですから54時間です。相当密度の濃いやり取りになります。これをどうするか。後藤田さんは最初「これは30年ぐらい寝かせておかなくてはダメだよね」と言っていました。しかしご本人が勇退するということになり、自分が歴史にある程度のことを残してきたものですから、ご本人としてもそのまま出してもよいことになりました。これはしめたものです。講談社から出版することになりました。講談社はオーラル・ヒストリーを売り物にしようと思っていましたから、我々と共同して売ってくれたのです。しかもちょうどその頃、村上春樹の『ノルウェイの森』が出て、この『ノルウェイの森』と似たようなカバーを、後藤田さんのオーラル・ヒストリー『情と理』［講談社、1998年］につけて、つまり、やや紛らわしいような様子にしました。ああこんなことをして売るんだ、と思いましたが、売れたのです。上下巻両方で、10万部ずつ売れました。ノンフィクションのようなもので、しかも後藤田正晴は、当時それほど有名ではありません。そのような警察官僚がしゃべった本が上下合わせて20万部売れるのはあり得ないことでした。これが社会現象になって、「オーラル・ヒストリー」という言葉が広く社会に流行していったのです。そうすると、今度僕らが「オーラル・ヒストリーをお願いします」と言いに行っても、相手は分かっていてくれている。だから「応じますよ」と言われるようになりました。

「じゃあ、その（オーラル・ヒストリーの）中でどのくらいのものが残っていますか」とよく言われます。「そういうのはやはり、一回期的なものでしょう。一回ある時期に評判をとったら、それでもう大体は無くなるのではないですか」と。我々もそのような感じは持っていました。しかし、25年経ってみると、やはりオーラル・ヒストリーの中に作品として残るものがあることに気がついたのです。例えば、この『情と理』という後藤田正晴さんのオーラル・ヒストリーは2000年代の中頃に一旦単行本としては消えるのですが、講談社は今度は文庫本にしました［講談社＋α文庫、2006年］。文庫本にしてから、なんと

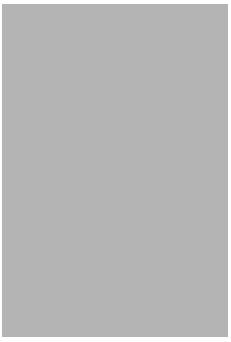
今日に至るまで上下ともに8刷です。毎年毎年、それほど多くの数ではないですが、着実に増刷をしているのです。おそらく来年はさらに増刷で9刷ぐらいになると思います。我々自身、「これ、誰が買っているのだろう」と思いますが、日本人がオーラル・ヒストリーで読むべきある種の古典になったのです。クラシックスと言っていい。だから、ずっと読まれ続けています。

それからもう一つ、90年代当時はいわゆる非自民の連立政権とか、あるいは自民の連立政権が交代してたくさんできた時期ですが、この時の官房長官を務めた、石原信雄（1926－）さんという方がいます。我々はこの石原さんのオーラル・ヒストリーも『中央公論』に連載し、のちに中央公論社から出版しました［『首相官邸の決断――内閣官房副長官石原信雄の2600日』中央公論社、1997年；中公文庫、2002年］。この本も評判になりました。ただ、その時に「これは普通の作品と違うのだな」と思ったのは、ご本人が我々だけではなくて、他の人の要求にも応じて同じ時期にしゃべっていたのです。だから、オーラル・ヒストリーとして我々の本だけが出回るのではなくて、他の人の本も出ることがあるのです。「ああそうか、ある時期にこの人のものが売れると思うと、出版社はそのようなことをやるんだ」と思いました。それで、今はどうなっているかと申しますと、出始めたのは2000年代初めですが、中公文庫になってから10年以上、20年近く増刷されていて、我々が行なったオーラル・ヒストリーだけが、内閣官房やそうした研究をするときの古典的な最初の入門書として認定され、残っています。我々と同じ時期に出版された他の出版社の本は、全部絶版になりました。やはり良いものは残る、きちんとやっていれば残って、作品として意味を持ってくるのだとつくづく感じました。

このようなオーラル・ヒストリーの本がどんどん出始めていった例で、おそらくクラシックスに入るだろうと思うのは、今年亡くなった、京都の政治家であった野中広務（1925－2018）さんです。この野中さんのオーラル・ヒストリーも岩波書店から出して、もう7、8年になります。単行本で出しました［『聞き書――野中広務回顧録』岩波書店、2012年；岩波現代文庫、2018年］。野中広務さんが今年亡くなった時に、たまたまもう在庫が無かったのです。岩波はこれを決定版にしたいと思い、半年をかけて改訂版を作り、「岩波現代文庫」の



『情と理――後藤田正晴回顧録〈上〉』
講談社、1998



『情と理――カミソリ後藤田回顧録上』
講談社＋α文庫、2006

形で残すことにしました。野中さんについても、他にオーラル・ヒストリー的なものはありますが、最終的には我々がしっかりとまとめあげたものが残って、作品としてこれからまたもう一度みなさんに読んでいただける存在になったのです。

このような経緯を見ていると、本当にオーラル・ヒストリー冥利に尽きると思うのですが、そういう長い年月を経て、玉のように磨かれて立派な作品になったオーラル・ヒストリーとは違うものが、もう一つあります。つまり、最初からクラシックスとしての価値を持つオーラル・ヒストリーも最近出てきました。これはどちらも私が関係していますが、一つは、文化人にして経営者であった堤清二［＝辻井喬（1927 – 2013）］さんです。2015 年に堤さんのオーラル・ヒストリーを出版しました［『わが記憶、わが記録――堤清二×辻井喬オーラルヒストリー』中央公論社、2015 年］。そして今から 1 年前に出たのは、今回文化勲章を受賞された山崎正和（1934 –）さんです［『舞台をまわす、舞台がまわる――山崎正和オーラルヒストリー』中央公論社、2017 年］。この二人のオーラル・ヒストリーは、最初から私は、オーラルでなければおそらくこの二人の生涯を描くことはできない、と考えていました。だから一対一で記録を取ることをしませんでした。

たとえば、堤さんの場合は、領域の広い人ですから、話題から逃げられる可能性がある。だから、政治に関しては私が質問者になり、政治の話をしていると、話題が逸らされていくのです。逃げられても大丈夫なように哲学者の鷲田清一を置いておく。それから経営の話題へと逃げるときもありますから、そうしたら経営学者を一人置いておく。専門の違う三人でぴったり堤さんをマークするやり方をとって、だいたい 2000 年代の初めくらいに一応の完結を見ました。それから出るまで、随分と時間がかかりました。堤さん自身が途中で心変わりをして、「やはりこれはどうも君たちに乗せられたような気がする。俺一人だったら絶対しゃべらないようなことをしゃべっているから、これは出したくない」と言われてしまいました。出したくないと言われても最初は出すという話だったのです。それで、いろいろ追っかけっこをしたりしました。最終的には堤さんが亡くなったので、もう出版は難しいかと思いましたが、幸いご遺族が非常に理解のある方で、我々が一所懸命やっていることを知ってくださっていました。そして、「これ、ちょっと内容を見ましたけれど、いかにも堤らしい。これを出したら堤は決して嫌だって言いませんよ」というサインを頂いて、出版できました。

山崎さんの方は、ご存命の方のオーラル・ヒストリーを出すのはいかがなものかという話もありました。しかし山崎正和さんも演劇人といいますか、もともと戯曲家でしたから、そのような経歴から考えると、もう何十年とこの国の政治・文化・経済を見てきた、あるいはそこに少し物を言ってきた人ですから、「そろそろしゃべってください」というお話をしました。私や、あるいはもっと若い人たち、阿川尚之さんや政治思想史の若い人たちを入れて、むしろ若い人がわからないことを山崎さんにぶつけて聞く形をとって、話を全部拾い出し

ました。最終的には山崎さんも出版はやぶさかではないということになりましたので、出版されました。

出版された時に、私が非常に嬉しかったのは、いわゆる、毎・朝・読・日経・東京・あるいは産経、この五、六大紙の新聞書評欄に二冊とも掲載されたことです。これは意外でした。オーラル・ヒストリーは資料集として小さく新聞に出ることはあっても、だいたい共同で行ったものは新聞が書評を嫌いますから、掲載されません。ところがこの二冊に関しては、とにかく五、六大紙に書評が出ました。もちろん、出すように我々も後押しはしましたが、それでも五紙全部に出ることは考えていませんでした。その堤さんについての本で、もう一つ嬉しかったことがあります。山崎さんについてもそうでしたが、皆さんが共通して、「これは本人が書いたらもちろんこういう形にはならなかったのだし、そして、雑誌のようにその人に付き回っている人が書いてもこうした完成度はなかった」と書いてくださったのです。この二冊はオーラル・ヒストリーがある種のクラシックスとしての完成形態を目指したもので、「まあ成功であると言っていいだろう」という過分なお褒めの言葉をいただいて、また頑張りたいなという気持ちを持ちました。

先ほど私は非常に堅苦しい定義を述べました。オーラル・ヒストリーはあくまでも公人の専門家による、そして全部公開しなければいけないという意味では、国民あるいは人民のための記録であるという言い方をしたのですが、これも最近大分違うなという印象を持っています。それは、以下のような例です。

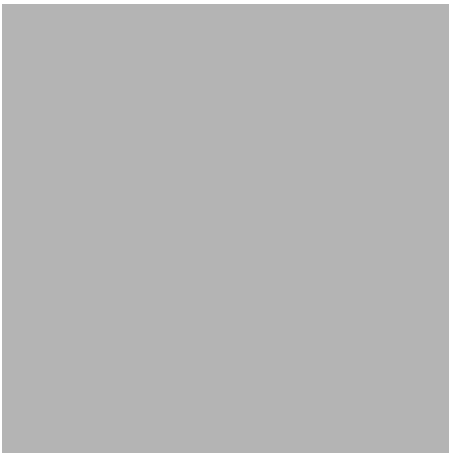
この十年くらい、オーラル・ヒストリーをやりたい、やってみたいということを私のところに来てお話になる方がいます。若い学生の人もいますし、特に定年退職間近の方が時々みえます。たとえば「実は、こういう上司がいた」と言う。「私とその上司が、いくつか非常に不本意な、経営における決定をしたけれども、それについて自分は生涯で一度、その本人から本音を聞きたい」と言うのです。「先生のオーラル・ヒストリーを見て、この方法しかないと思って来ました」と。この方法しかないと思って来たと言われても、喧嘩されても困ります。「じゃあ、まずどうしたらいいですか」と聞かれたので、「会社にはOBと一緒に交わるような会があるでしょう。そのOB会にとにかく行ってごらんなさい。行ったら結構酒が入ったところで、意外に昔話を聞くものです。その決定が良かったか悪かった、そこで言ってはいけませんよ。でも、『こういうことをあなたはなさいましたね。どうしてなさったのか、ちょっとお話を伺いたい』と言うと、やはりしゃべりたいと思っている人は、そこで、じゃあ乗ろう、という話になりますよ」と言いましたら、その人の場合、本当にトントン拍子で話に乗ってくれたそうです。プロではありませんから、出来としては素晴らしく滑らかに出来上がったものではありませんが、訥々と聞いているところに新鮮味がある。答える方も一所懸命思い出して答えているな、というところがそのまま出ている。「この件は、何とかしましょうね」と言っているうちに、残念ながらそのオーラル・ヒストリーに応じてくれた方が亡くなって

しまいました。でも、遺族の方も出したいと言っているので、いま一緒に話をしながら「じゃあ自費出版でも出そう」と話しています。こうした例があるのです。人間はやはり、誰でも一人ずつ、ものを聞いてみたいという欲求があることがよく分かる例です。

もう一つの例を挙げましょう。これは学生の例です。広島の学生でしたが、東京の大学に来ていました。誰のオーラル・ヒストリーをやりたいのかと聞いたら、「うちの、自分とは仲の悪いばあさんです。ばっちゃんの話を聞きたい」と。何の話を聞きたいのかと尋ねると、「やはり広島です。広島で戦火に遭って、そういう話をばあちゃんが時々しているのは知っているけれど、普段は仲が悪いから聞いていない。でも、この際まとめて聞いておきたい」とこう言うのです。「広島にいるばあちゃんを東京に連れてくるわけにも行かないしどうする」という話になった時に、私が「あ、この方法がある」と思ったのは、アメリカではよくある方法でした。アメリカは州と州が遠いですから、いざというときには電話インタビューをするのです。だから、その学生に向かって言いました。「君ね、電話代がかかるぞ」と。「それ全部、お前持ちだぞ」と。覚悟があるなら4時間か5時間ぐらい、ばあちゃんの話をとれるだけの自信はあるかと聞いたら、「やってみます」と言いました。やったところ大成功でした。ばあちゃんは普段は孫の言うことを聞きもしないし、「ふん」と言っていたのが、電話で懐かしい声が聞こえて、しかも「あなたの昔話が聞きたい」と孫が言った瞬間に、ばあちゃんははまってしまったのです。彼は、その電話の記録を全部とっていましたが、それをうまくまとめて、自分のばあちゃんの戦争の記録にしたのです。「これは自分の宝物です」と言って彼は持って帰りました。

このように、何でもない人たちが、自分の身内や、あるいは身内でなくとも自分の関係した人に、一度はものを聞いておきたいと思っている。だから、そこのところを私は今、みなさんと一緒に頑張って取り組みたいと思っています。これはある意味でいうと「おひとりさまオーラル」です。「誰でもできます」というキャッチコピーを使っています。つまり、人間誰でも誰かに一回は聞きたいことがあるでしょう。それを聞いてみよう。聞くときにちゃんとうまく聞けるようにお膳立てをして、一応私はオーラル・ヒストリーの先生ということになっているので、私の名前を使っていいから、それでまず始めてみようと提唱しています。私の周辺で、いくつもそうしたオーラル・ヒストリーが始まっています。有名人や公人からきちんと記録をとることとは違うのですが、やはりオーラル・ヒストリーを行うことによって、本人が非常に豊かになります。何人かのうちには、こうしたことに取り組んでいるうちに、記録をとることの意味は何か、あるいは記憶とは、一体人間というのはどういう風にして自分の記録を思い出していくことになるのか、そのようなことを研究するグループがいくつも出来ています。先ほど言いましたオーラル・ヒストリーが作品としての価値を有するに至るのとは違うものです。それでも、その人にとっては価値があるオーラル・ヒストリーが、いま出来始めています。

オーラル・ヒストリーを始めてから四半世紀が経ちますが、あの四半世紀前



事前収録映像での特別講演（2018 年 11 月 17 日）

に先輩から言われたこと、つまり、「所詮、これは方法に過ぎないのであって、それ自身が作品であるとか、それ自身が意味を持つとか考えてはいけない」というのは、疑わしくなってきたと思っています。今後も、政治や文化に関わった方や、あるいは、先ほどの例のように自分の上司で、いろいろな仕事をした人について聞きたいという人たちを、私は助ける。助けるという言い方をすると僭越ですが、そういう人たちと一緒に新しいオーラル・ヒストリーを切り拓いていきたいと思っています。もちろんすでに私の後継者たちが、政治家や官僚のオーラル・ヒストリーを山ほど行っていますから、そちらの方は若い人に任せて、私としては今話した希少価値のある領域に出ていきたいと思っている次第です。

最後に一つだけ付け加えます。この10年あるいは15年、よく聞かれます。「御厨さん、オーラル・ヒストリーをやっていて、面白い人に出会いますか？」と。これは微妙です。やはり最初にオーラル・ヒストリーの対象とした人たちの方が、すごく魅力的だったし、話も面白かった。やはり日経新聞の「私の履歴書」も、起伏がある人生を送っているという点では、最近の人たちはどこか型にはまっています。型にはまっている中で、面白いところはあるのだけれど、全体としての面白さはどうも無くなってきているなというのが、オーラル・ヒストリーを行なっていてつくづく感じることです。おそらく、これがいまの日本社会の一つの現象だろう、と思っております。

（みくりや　たかし・東京大学先端科学技術研究センター客員教授）

「生成（ジェネティック）するアーカイヴ：創造の軌跡をもとめて」（2018 年 10 月 26 日開催）より

「シンポジウム『ジェネティック・エンジン』」（2018 年 11 月 17 日開催）より